

日本哲学プラクティス学会第1回大会プログラム

日時：2018年8月26日（日） 9:00～19:00

会場：明治大学 和泉キャンパス第一校舎 地下一階

- 個人研究発表・ワークショップ
会場1（008教室）、会場2（007教室）、会場3（002教室）、会場4（003教室）
- 総会、シンポジウム 会場1（008教室）
- 委員会 004教室
- 参加者控室 001教室



〒168-8555 東京都杉並区永福 1-9-1

タイムスケジュール

- 受付 8:30～
- 個人研究発表、ワークショップ（午前の部） 9:00～12:40

会場1（008教室）

- ① 9:00～9:40

片山守道「新教科「てつがく」を中核に据えた教育課程の構想」

- ② 9:40～10:20
辻和希「文章チュータリングに対する哲学カウンセリングの理論の援用」
- ③ 10:30～11:10
内久根直樹「新学習指導要領下での哲学対話的手法の導入の可能性——高校現場でのサイレントダイアログの実施を事例として——」
- ④ 11:10～12:40
ワークショップ「哲学プラクティスにクリティカルシンキングはどう関わるか」(代表者：菊地建至)

会場 2 (007 教室)

- ① 9:00～9:40
稲原美苗「哲学的当事者研究の可能性——造形制作を通じたピアとの対話の意義について——」
- ② 9:40～10:20
生井亮司「美術制作と哲学対話、その過程における〈主体〉についての一考察」
- ③ 10:30～11:10
桂ノ口結衣「哲学対話において「発言はしなくても OK」か? ——オスカル・ブルニフィエの哲学プラクティスから——」
- ④ 11:10～11:50
佐々木寛太郎「ウォシの論理体系 L における部分系 S と「深い不同意」について」
- ⑤ 11:50～12:30
松島恒熙「対話における「問いの深まり」と「公共性」について」

会場 3 (002 教室)

- ① 9:00～9:40
酒井雅子「哲学的討論で求められる教師のファシリテート力——ソクラテック・メソッドと P 4 C の比較から——」

- ② 9:40～10:20
堀越耀介「探究の共同体における「思考」をどのように位置づけるべきか——「子どもの哲学」の目的をめぐって——」
- ③ 10:30～11:10
皆川朋生「哲学教育における知識の意義について——R・ローティと子どものための哲学をてがかりに——」
- ④ 11:10～11:50
堀江剛「哲学する装置——ソクラテック・ダイアログ——」
- ⑤ 11:50～12:30
宮下篤志「経営マネジメントにおける哲学対話の効用——哲学対話のビジネスへの転回の実践報告——」

会場4 (003 教室)

- ① 11:10～12:40
ワークショップ「よい問いとはなにか?——みんなで考えるに値する哲学的な問いをつくるワークショップ——」(代表者:田代伶奈)

- 昼休み 12:30～13:30
- 委員会 (004 教室) 12:40～13:30
- 総会 (賛同人のみ, 008 教室) 13:30～14:00
- 個人研究発表、ワークショップ (午後の部) 14:10～15:40

会場1 (008 教室)

- ① 14:10～15:40
ワークショップ「日本における「哲学プラクティス」とは何か?」(代表者:小川仁志)

会場2 (007 教室)

- ① 14:10～14:50
西山雄二「フランスの大学改革と哲学教育」
- ② 14:50～15:30

田中一孝、畑野快「高等教育における「哲学的能力」の測定とその課題」

会場3 (002 教室)

- ① 14:10～14:50
辻明典「原発禍と人びとの哲学」
- ② 14:50～15:30
村上祐子「哲学プラクティス B2B」

- シンポジウム (008 教室) 15:50～18:20
「哲学プラクティスの〈場〉とは?——教育・研究・制度——」
登壇者：神戸和佳子、小玉重夫、松川絵里、司会：ほんま なほ
- ネットワークキングタイム 18:30～19:00
参加者間の交流の時間です。お茶菓子を用意します。カンパ制。

予稿集

シンポジウム (p. 6)

個人研究発表・ワークショップ

会場 1 (pp. 7-13)

会場 2 (pp. 14-23)

会場 3 (pp. 24-31)

会場 4 (p. 32)

シンポジウム

会場 1 (008 教室)

タイトル：「哲学プラクティスの〈場〉とは？—教育・研究・制度—」

登壇者：神戸 和佳子、小玉 重夫、松川 絵里

司会：ほんま なほ

「哲学プラクティス」は、哲学者が相談所を開き、さまざまな人と対話する活動からはじまりました。現在では、この語は哲学に関する多様な対話活動を包摂するようになり、さまざまな実践者が、個人またはグループで、個人相談所、施設、会社、病院、学校、その他の場所でそれぞれの試みを展開しています。このように活動が多様化するなかで、それぞれの実践者が哲学というものを誰にとっての何であると考えているのか、そしてどのような場所でどういう人たちとともに何をめざして活動するのか、集まって議論する機会は多くありませんでした。

どのような実践であれ、哲学プラクティスが、学校、病院、福祉、企業など社会の諸制度と関係をもつとき、どういう緊張関係や問題があり、どういう連携があるのでしょうか。また、哲学（研究）という制度、教育という制度、そして社会的・公共的制度との関係は、どうなっていて、どうあるべきなのでしょう。「日本哲学プラクティス学会」の設立にあたって、こうした問いは本質的な意味をもつでしょう。第一回大会のシンポジウムを、「哲学プラクティスの「場」とは」という問いについて多角的に議論する場にしたいと思います。

個人研究発表・ワークショップ

会場 1 (008 教室)

片山 守道 (お茶の水女子大学附属小学校)
タイトル: 新教科「てつがく」を中核に据えた教育課程の構想
キーワード: 思考力 人間性・道徳性 対話 記述
発表内容、要旨 <p>発表者の勤務するお茶の水女子大学附属小学校 (以下、お茶小と称す) では、平成 27 年度より 4 年間、文部科学省より研究開発学校の指定を受け、《『道徳の時間』と他教科の関連を図り、教育課程全体で、人間性・道徳性と思考力とを関連づけて育む研究開発を行う。そのために、自明と思われる価値やことがらを、「対話」や「記述」などの多様な言語活動を通して問い直し考える新教科「てつがく」を創設する。》という研究開発課題で、学校を挙げて研究に取り組んでいる。</p> <p>本研究発表では、新教科「てつがく」の創設を中心として、各教科等を含めた教育課程全体で“てつがくすること”を志向したお茶小の哲学プラクティスに関する研究について概説し、小学校の教育課程に哲学プラクティスを取り入れていく意義や方法、子どもの学びについて考察を加えて、その可能性を論じていく。</p> <p>新教科「てつがく」は、学問体系としての「哲学」を学ぶのではなく、様々な価値や概念と向き合い、「対話」「記述」などを通して互いの考えを聴き合い、自ら問い直し考え続ける“てつがくすること”に特化して取り組む学びである。思考力と人間性・道徳性を関連づけながら両面の育成を志向している。新教科「てつがく」は、3 年生以上で、週 1 コマ時間割に位置付け、さらに、朝の時間にも「てつがく」の時間をとることで、年間 5 5 時間を確保している。</p> <p>“てつがくすること”とは、既知と捉えている事象や概念の意味や価値などに対して“問い”をもち、性急に答えを求めることなく「概念探究」したり、「共通了解」を図ったりしながら思考していくことで、自らの考えを広げたり深めたりしていくことと考えている。</p> <p>開発研究 1 年目は、研究の基盤となる“てつがくすること”の意味を追究してきた。併せて、教師集団で哲学カフェを開くなど、教師自身が“てつがくすること”を体験し、その意味を体感的にとらえてもきた。2 年目には、時間割上に新教科「てつがく」を位置づけ、授業実践を積み重ねながらカリキュラム試案の作成に取り組んできた。3 年目には、新教科</p>

「てつがく」の構想を整理し、学習指導要領案を作成した。また、評価の方法なども追究してきた。最終年度となる今年度は、新教科「てつがく」と各教科等で“てつがくする”教育課程を検証するとともに、できるだけ具体的に構想を提示できるよう努めているところである。

4年間の取り組みの意義と成果や課題から、小学校における哲学プラクティスの可能性を探っていきたい。

辻 和希（早稲田大学 大学院生）
タイトル：文章チュータリングに対する哲学カウンセリングの理論の援用
キーワード：哲学カウンセリング、哲学対話、文章チュータリング
<p>発表内容、要旨</p> <p>本発表の目的は、ピーター・B. ラービ（Peter B. Raabe, 1949-）の哲学カウンセリングの理論を早稲田大学ライティング・センターの文章チュータリングにどのように援用できるのかを検討することである。</p> <p>早稲田大学には、2004年からライティング・センターが設置されている。このセンターは、学生と教員を対象に、文章作成を支援することを目的としている。センターの理念の1つに「『紙を直す』」のではなく『書き手を育てる』というものがある。書き手を育てる際に、センターで働くチューターは大きく2つの課題を抱える。1つは、文章自体の改善を求める書き手に対して、どのように上記の理念を実現すれば良いのかという課題である。書き手を育てる際には、「主張・構成・論理・研究手法・批判的姿勢・内容に深くかかわる問題」といった優先度の高い問題、言い換えれば、HOC（higher-order concerns）を扱うことが効果的と考えられている。もう1つの課題は、チューターはどのようにしてHOCを扱えばいいのかということである。</p> <p>これらの課題に関して、哲学カウンセリングの理論から解決の糸口を見つけ出すことができる。具体的には、次の2点が挙げられる。1点目は、哲学カウンセリングにおいて、クライアントに哲学的な思考技術を習得させる際のカウンセラーの姿勢である。ラービの哲学カウンセリング理論では、クライアントが抱える問題の解決と哲学的な思考技術の取得は峻別されている。こうした姿勢は文章チュータリングの際も重要になるであろう。2点目は、哲学的な思考技術自体である。仮説の設定と検証、例と反例の提示といった技術を身につけることは、論文を執筆する際にも、非常に効果があると思われる。</p> <p>以上のように、本発表では哲学カウンセリングが文章チュータリングにどのように援用できるかを検討して行く。その結果、文章チュータリングの技術向上への新たな展望を示すだけでなく、哲学カウンセリングの理論が生きる新たな場の拡大にも繋がるであろう。</p>

内久根 直樹（千葉県立東葛飾中学校・高等学校 公民科教諭）
タイトル：新学習指導要領下での哲学対話的手法の導入の可能性；高校現場でのサイレントダイアローグの実施を事例として
キーワード：サイレントダイアローグ アクティブラーニング 評価 新学習指導要領 公共
<p>発表内容、要旨</p> <p>社会の変化に対応すべく新学習指導要領が出され、授業のあり方が大きく変わろうとしている。目玉は授業方法の改善と科目の再編である。まず授業方法の改善では従来の講義形式での一斉教授の手法を見直し、アクティブラーニングが導入される。「主体的で対話的な深い学び」として定義されたこの授業の改善には、評価と一体となった授業改善が必要だと強調されている。ではどのように評価をするべきなのか。次に科目の再編では「公共」が目玉である。この科目はこれまでの「現代社会」に替わって 18 歳選挙権時代に対応すべく生徒が多面的・多角的に物事を捉えることが謳われている。そしてこの「公共」を元にこれまでの「倫理」の授業のあり方も再構築されることになっている。高校生が学校で初めて哲学に触れる機会の一つになる公民科が再編され、授業が再構築される中で注目を集めているのが哲学教育、特に哲学対話的手法である。</p> <p>この哲学対話的手法は生徒の主体性、対話性を涵養するために有効であると考えられる。そのため今後学校現場でより普及して行くことが予想されるが、手法としてより一般化していくには課題もある。それは評価の観点である。どのように評価基準を定め、実施していくのか。この課題の克服は哲学対話的手法の教育現場への浸透をより促すと筆者は確信している。</p> <p>そこで本発表では以上の変化を概括した上で、筆者が実践している哲学対話的手法の一つである紙の上で議論を深めるサイレントダイアローグの現場での実際を紹介する。そして生徒がどのように活動し、課題に向き合い、変化していったのかを実際のワークシートを通して参加者の方と対話を行っていききたい。</p>

代表者：菊地 建至（金沢医科大学）
タイトル：ワークショップ 「哲学プラクティスにクリティカルシンキングはどう関わるか」
キーワード：クリティカルシンキング 哲学プラクティス 有用性と弱点 教育態度変容
<p>発表内容、要旨</p> <p>本ワークショップ（以下 WS）の目的は、「哲学プラクティスにクリティカルシンキング（以下 CT）はどう関わるか」についての知とその知を生かした活動を前進させることです。主催者は、菊地建至（金沢医科大学）、神戸和佳子（東京大学）、古賀裕也（かえつ有明中・高等学校）、永井玲衣（上智大学）の4人です。「どのような CT が何のために重要か」「CT 及びその学びの有用性や弱点はどういうことか」「CT をどのようにして身につけるのが良いか」という問題を共に意識しつつ、各自の関心で独立した発表を行い（各 10 分程度）、その後、4 人とフロア参加者を合わせた全員での対話の時間を設けます（約 50 分間）。</p> <p>古賀裕也「CT の無力感を学ぶ中で CT をどう教えるか」</p> <p>理解が追いつかないような失言報道を見るにつけ、中高での CT 教育の重要性はいよいよ高まっていると思われる。だが子どもたちの現状は CT 能力がゼロなのではなく、「ここが変だと言ったのに、変わらない」「おかしいと言ったら、おかしい奴扱いされた」などという経験を重ねることでむしろ CT の無力感を学んでしまい、CT を自発的に停止してしまっているということではないか。そのような中で CT 教育を行う矛盾を考えたい。</p> <p>永井玲衣「CT と哲学対話は相互に何をもたらすか」</p> <p>学校や自治体、企業などでの哲学対話実践の中で、CT が必要だと感じられた具体的な場面をもとにお話しします。また同時に、CT にどのような弱点があるかも考察します。それでもなぜ CT が有意義だとだと言えるのか、そして哲学対話の中でどのようにして CT を主題的に取り扱うかについての提案もしたいと思います。</p> <p>神戸和佳子「授業後も CT を続けるために何ができるか」</p> <p>教育現場で CT 教育を行う機会は限られている。ほんの数時間の授業で、批判的思考「力」のような新たな能力が身に付くとは思えない。したがってこうした場合、授業はきっかけにすぎない。その中で、自分自身や他者の思考を気にかけて、みずから吟味しようとし続けるような、気づきや態度変容をいかに生じさせられるか。これまで高校や専門学校で行っ</p>

た、演劇や対話を用いた授業の事例から検討したい。

菊地建至「哲学プラクティスと関わってCTはこうなった」

医学部での授業や日々の仕事の中で、CTをどのように生かし、どこで立ち止まったか。これらに関してわたしの経験と考察について話すとともに、古賀・永井・神戸の発表を聞いて考えていることも話します。

代表者：小川 仁志（山口大学国際総合科学部）
タイトル：ワークショップ 日本における「哲学プラクティス」とは何か？
キーワード：哲学プラクティス、範囲、可能性
<p>発表内容、要旨</p> <p>日本における「哲学プラクティス」を研究するための学会が立ち上がった。本ワークショップでは、「日本哲学プラクティス学会」を主体的に運営する側の運営委員メンバーが中心となって、今この国で哲学プラクティスを行うことの意義、そしてその営みを研究することの意義について問いかけたいと思う。</p> <p>その際、そもそも日本における「哲学プラクティス」とは何を意味するのか、その範囲やそれが包含する内容について、改めて確認しておきたい。学会の設立趣旨には、「おもに対話という方法をもちいながら、哲学的なテーマについて共同で探究する実践的な活動」を指すとある。そしてその例として、「哲学カフェ」や教育現場での「哲学対話」実践が挙げられている。しかし、哲学的なテーマについて共同で探究する実践的な活動はこれらにとどまらないはずである。</p> <p>この学会で今後議論していくことになる問題群や事象が、どういった内容のものであるべきなのか、最初の大会で確認しておくことには意義があるものと思われる。あえて設立趣旨に列挙されているような狭義の哲学実践に限るのか、それとももっと大きな可能性を探っていくのか、その場合の問題点は何なのか。</p> <p>以上のような問題意識は、運営委員の間でもある程度共有されているものと思われる。しかし、それに対する答えは、それぞれの立場によって異なっている。その意味で、立場の異なる複数の研究者及び実践者から提題させていただく。参加者諸氏からの批判的かつ建設的な応答を期待したい。</p> <p>発表者（五十音順）：小川仁志（山口大学）、齋藤元紀（高千穂大学）、高橋綾（大阪大学）、土屋陽介（開智国際大学）、ほんまなほ（大阪大学）、村瀬智之（東京工業高等専門学校）</p>

会場 2 (007 教室)

稲原 美苗 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)
タイトル: 哲学的当事者研究の可能性—造形制作を通じたピアとの対話の意義について
キーワード: 当事者研究、造形制作、ピアとの対話、フェミニズム現象学、疼痛
発表内容、要旨 <p>医療とは、人間の健康と病気に関する実践のことであり、一般的に客観化・数値化できる問題を取り扱う。例えば、血糖値や血圧などがある一定水準を超えると、糖尿病や高血圧症と診断される。しかし、「それらの症状と共に生きることは、どのように生きづらいのか」という問いについては、これまで重要視されてこなかった。本発表では、数値化・言語化できない疼痛に苦しむ当事者との造形制作と対話実践の中で、疼痛について考え、形を作り、形を見て、他者の語りを聞き、自ら語っていくことの意義を探る。ピアとの対話としての当事者研究は、これまで医療分野が見てこなかった客観的に診断できない「当事者の現象」を捉え直していくという試みだと捉えられる。</p> <p>疼痛に苦しんできた当事者同士の対話実践の中で、二つの疑問が出てきた。一つ目は、なぜピアとの対話をするとう「そうそう」や「あるある」というように共感が起こるのか。もう一つは、どうして疼痛を表現し、語ることで、当事者に医療者や周囲とのコミュニケーションの変容を促すのか。このような疑問を考えていく中で、数値化・言語化できない疼痛現象に関して直接的に語るというのはとても難しいことだと認識できた。本発表では、2017年11月に神戸大学で開催したワークショップの実践を例に挙げて考察する。このワークショップでは、イギリスで長年慢性疼痛患者とのアート制作実践に携わってきた Deborah Padfield 氏(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン、スレイド美術学校・ロンドン大学セント・ジョージズ病院医学部特任講師)を招き、異なる疼痛を抱えた3名の当事者がそれぞれの痛みの経験や現象を造形化した。それらの造形制作のプロセスを通して、ピアとの対話の意義についてフェミニズム現象学の視座から考究する。</p>

生井 亮司（武蔵野大学）
タイトル：美術制作と哲学対話、その過程における〈主体〉についての一考察
キーワード：アート、美術制作過程、対話の過程、主体、生の技法
<p>発表内容、要旨</p> <p>本発表は美術作品の制作過程と哲学対話の過程について比較検討するものである。発表者は美術家、美術教育研究者として活動する一方で哲学カフェ、哲学対話の実践を行っている。</p> <p>美術制作とは制作者の主体的な意識によって成り立つと思われている。しかしながら、多くの美術家が述べるように、美術制作は制作者が主体的に作るのではなく、その過程において制作者はむしろ作らされているということを実感させられることになる。つまり美術作品の制作過程における一つの意義は、制作過程において素材やモチーフといったものと関わることによって主体が転換されることにあるといえる。こうしたいわば主体の転換は、言い換えるならば外的な要素である素材やモチーフといったものとの関係性に新たな意味を見出すことを意味している。すなわち美術作品の制作過程における主体あるいはエージェンシーの転換が制作者に世界の新たな意味を開示し「世界そのもの」と新たな関係を取り結ぶことを可能にする。</p> <p>一方で哲学対話の過程においても同様のことが体験されているのではないだろうか。例えば、哲学対話では日常において当たり前だと思っていることを、改めて問い直すといったことを行う。参加者それぞれの日常の経験を出発点にしながらも対話の過程を持続することは、参加者の主体性を他の参加者、あるいは対話という空間に明け渡していくことによって成り立つ。それゆえに「語ること」以上に実は「一旦黙ること」に意義があるのかもしれない。つまり一旦黙ること、すなわち参加者自身の主体性を弱め、その空間に一旦主体を譲ることによってこそ、当たり前だと思う意味や概念に改めて出会い直すことを可能にするのである。</p> <p>以上のように美術制作の過程と哲学対話の過程は世界を問い直し、新たな意味や関係を見出すということにおいてアナロジカルな関係であると言える。また、世界の問い直しや新たな意味を見出すと言うことは、既に意味や概念によって分節された世界の区切り解し、世界そのもの、あるいは始原的な世界から、世界を編み直すことになるであろう。そうした意味においても美術制作、哲学対話は先を見出すことの困難なポストポストモダンを生きる私たちにとって必要な生の技法となるのではないだろうか。</p>

桂ノ口 結衣（大阪大学 文学研究科文化形態論専攻（臨床哲学））
タイトル：哲学対話において「発言はしなくても OK」か？：オスカル・ブルニフィエの哲学プラクティスから
キーワード：マイノリティ、進行役、ケア、オスカル・ブルニフィエ、私は怒ってる
<p>発表内容、要旨</p> <p>フランスの哲学プラクティショナー、オスカル・ブルニフィエの「Stay with Others」を核とする進行姿勢を通し、哲学対話と「発言しない参加者」との関係性に再考を迫る。この関係性は、哲学という営みが、声をあげ／聴かれがたい人たち、マイノリティをめぐる問題とどのように関係するかの具象でもある。</p> <p>これまで日本の哲学対話では、進行役や参加者自身の態度として「参加者が発言しない（聴くのみである）ことを OK とする」方針がしばしば取られてきた。発言を強要しないことは、場における進行役等一部の人がもちうるパワーとコントロールを抑制する一つの方策であり、また様々な思いをもって「待つ」試みの一つであると考えられる。</p> <p>だが、哲学対話は、人と、共にする、哲学の営みである。私たちは、「発言しない人」と「共に」哲学する手だてを、本当にもっているだろうか。尊重し待っているつもりで、実際には単に放置している時間がなかったか。逆も然りで、「発言しない人」であり続けるとき私たちは、それでも人と「共に」考えることを本当にしているだろうか。目の前の人達を、まるでラジオのように楽しんではいなかったか。</p> <p>オスカルの哲学対話進行は、何よりも場において「Stay with Others 人と、共にいる」が実現されているかをケアする。そのために、しばしば「発言しない／できない」という態度を伴って場に現れる、最も遅い人、最も理解が困難な人、最も人々から理解されにくさを抱える人に場の思考速度を合わせる「Start with Minority マイノリティから、スタートする」という姿勢を取る。この「Start with Minority」の姿勢と、知らなさ・分からなさとして徹底して付き合うことにやぶさかでない「哲学」との相性のよさこそ、ある対話が「哲学対話」であることの本来のなつよみと発表者は考える。</p> <p>踏み込めば、もし「哲学対話」が「発言はしなくても OK」と謳い続けるなら、それはつよみを失う以上の意味を持ちうる。多文化共生社会をきり拓く実践と理論を展開しつつける榎井縁は、社会におけるマイノリティの状態を「いるのにいない、いないのにいる」と言語化した。いるのにいないように扱われる、あるいは、いないものとされているところに実際にはいる。発言しない参加者の放置は、場に「いるのにいない、いないのにいる」人を生み出す。この根は、社会において、「いるのにいない、いないのにいる」誰かがいることを黙認したまま言葉・思想・哲学がつくられていく排除実践を、再生産・強化する</p>

ことにまで繋がるだろう。

佐々木 寛太郎 (ワルシャワ大学)
タイトル: ウォシの論理体系 L における部分系 S と「深い不同意」について
キーワード: イェジ・ウォシ、対話論理、深い不同意
<p>発表内容、要旨</p> <p>形式系は実質的に対応する現象から生み出される。だが形式化された後にはそうしたスタートアップ時の現象から切り離された独自の発展を遂げることが可能であり、多くの形式系は独自の発展、つまりは記号の自律的運動、自由な展開のもとでそれ自体の発展性を高めてゆく。だが他方で生み出された源としての現象の蒙古斑を捨て去ることはできない。ゆえに記号の運動に内在的ではない考察、つまりは蒙古斑を梃子とした非形式的な議論、哲学的な考察が形式系には常に回帰する。</p> <p>こうした発想に基づき、本発表では哲学プラクティスの前提である「対話」という現象を形式的に表現したイェジ・ウォシ (Jerzy Łoś) の試みを検討する。彼の形式系 L は対話論理の初期に属するものである。L においては今日の認識論理における基礎的公理 (T, K, 4) が与えられているが同時にはみ出す部分 (部分系 S) が含まれている。今日の観点からすれば S はヤシコフスキ (Stanisław Jaśkowski) が後に提起した対話論理の先駆け、あるいは状況意味論における共有知識の表現と捉えることが可能である。とはいえ、彼自身のモチベーションに従うならば S は「同意／不同意の論理」の形式的表現、対話を巡る人々のやり取りを形式に落とそうとした原初的試みと捉えることが妥当である。</p> <p>そうした動機が分かりやすく表現されているのは「人 x が命題 β に同意する」(człowiek x uznaje zdanie β) と解釈される内包的な論理式「$Lx\beta$」におけるオペレーター L を用いて、ある議題 β に関して不同意 (jest sprone, ze β) が発生する事態に関してオペレーター S を導入して「$S\beta = \exists x \exists y Lx\beta \ \& \ Ly\neg\beta$」と定義して議論を進めてゆく部分にある。この個所は部分系 S の要であるが同時に部分系 S の考案においてウォシが捨象した現象を明らかにもしている。それはある人 y が議題 β に不同意である ($Ly\neg\beta$) というときに、理由ある不同意なのか、理由なき不同意なのかを考慮しない点、つまり議題 β に関する不同意がいかなる原因に基づくのかは問わないという点に現われている。</p> <p>興味深いことに対話における理由なき不同意を巡ってフォグリン (Robert Fogelin) が「深い不同意」(deep disagreement) と名付けた問題、つまり理由なき不同意、不同意のための不同意が 2000 年代初頭にクリティカルシンキングの分野で係争的議題とされた。この「深い不同意」を前提として部分系 S における人 y の振る舞いの内実を問うことこそ</p>

哲学プラクティスの試金石であると同時に哲学における実践が発生する地点の一事例とみなせるはずだ。以上を踏まえてウォシの形式系と「深い不同意」の衝突地点に合意される対話の論理の基盤と諸相を考察する。

(参考文献)

Łoś, J., “Logiki wielowartościowe a formalizacja funkcji intensjonalnych” *Kwartalnik Filozoficzny* 17 (1):59–78, 1948.

Fogelin, R., “The logic of deep disagreements” *Informal Logic* 7(1):3–11, 1985.

松島 恒熙（筑波大学大学院人文社会科学研究所、つくば開成国際高校）
タイトル：対話における「問いの深まり」と「公共性」について
キーワード：公共性、共同性、多様性、差異、現れ
<p>発表内容、要旨</p> <p>近年、哲学カフェ・哲学対話・対話型授業と呼ばれるものが全国的に広がりを見せている。対話は現代社会において多種多様な場において行われている。そしてその社会的効果も、あらゆる研究・実践によって報告されている。しかしながら、そのような対話の場面において、問いが深まる場合とそうでない場合があるように思われる。それはなぜだろうか。そもそも「問いが深まる」とは、どのような意味であろうか。また、問いは深められるべきなのだろうか。本発表は、これらの問いを契機として、対話の在り方を「公共性」概念と結び付けて考察していく試みである。その際、参考にするのは、ハイデガーの世人論における「公共性 Öffentlichkeit」概念と、彼の弟子でもあるアーレントの活動論における「公共性 publicness」概念である。</p> <p>まずハイデガーの世人論における「公共性 Öffentlichkeit」では、「空談・おしゃべり Gerede」と呼ばれるものが場を支配することを示す。この空談において重要なのは、何かが共に語られているということだけであり、語られた内容はいつそう広い範囲へと広まり、「ひとがそう言うから、実際そうなのだ」(SZ 168)というふうに、ある種の権威あるものにまで成長するほどである。そのような「語りまね」(SZ 168)や「語り広め」(SZ 168)によって、語られている内容は世間的な自明性を帯び、そもそもなぜそうなるのかということは、根源的には問われなくなる。このような世人の「公共性」が場を支配するのであれば、その対話は深まらない＝根こそぎにされるであろうし、つまらない＝屈辱なものとなるであろう。</p> <p>以上のようなハイデガーにおける世人の「公共性」に対して、アーレントの活動論における「公共性 publicness」とは、人々が「言論 speech」や「活動 action」によって各自の意見を公表し、その「差異 distinction」において自己を現す場であるとされる。この「公共性」においては「多種多様な人々がいるという人間の複数性（多様性） plurality」(HC 175)が実現されなければならない。世人の「公共性」においては誰もがその「平均性」を気遣っていたのに対して、アーレントの「公共性」には、言論と活動を通して自己を現すという「唯一性 uniqueness」が求められるのである。</p> <p>本発表では、以上のような2つの「公共性」概念を比較検討しながら、「問いの深まり」やその先の「合意」、「相対主義」の問題などについて考察していきたい。</p>

SZ= Martin Heidegger, Sein und Zeit, 18. Aufl., Max. Niemeyer, 2001

(『存在と時間』からの引用はSZと略記した後にページ数を示す。)

HC=Hannah Arendt, The Human Condition, The University of Chicago Press, 1958

(『人間の条件』からの引用はHCと略記した後にページ数を示す。)

西山 雄二（首都大学東京）
タイトル：フランスの大学改革と哲学教育
キーワード：哲学教育 大学改革 フランス バカロレア
<p>発表内容、要旨</p> <p>史上最年少のマクロン大統領が誕生してから、フランスでは 2017-18 年に労働法改正、国鉄改革などの社会改革が相次いだ。その最大の試みは大学入試改革である。これまではバカロレア（大学入学資格）を取得すれば、高校卒業者は選抜無しで学籍登録できる「開放入学制」だった。新制度では、志望大学・学部を 10 まで登録した上で、高校の成績や内申を考慮して選抜がおこなわれる。この新たな「選抜の論理」に反対して、少なからぬ大学は学生らによってバリケード閉鎖され、授業や試験がボイコットされた。</p> <p>大学入試の改革では科目数が大幅に減らされたが、最終の筆記試験四科目に哲学は残された（フランス語と哲学、選択二科目）。政府は事前に哲学教師協会と話し合いもしたが、哲学試験がフランスの尊重されるべき伝統として残されたのだろうか。現在、哲学試験は大学入学試験の初日午前実施され、文系、社会経済系、理系とも四時間の論述形式によって論理的な思考力が試される。哲学教師らは哲学科目が再評価されたと喜んでいるが、哲学はつねに体制側の「イデオロギーの武器」となりうる以上、これは「毒まんじゅう」と忠告する者もいる。</p> <p>2017-18 年に在外研究でパリに滞在した発表者は、高校での哲学の授業見学をし、関係者らと意見交換をした。本発表では、フランスの現場報告をおこない、哲学教育の現状と意義について考える。</p>

田中 一孝（桜美林大学）・畑野 快（大阪府立大学）
タイトル：高等教育における「哲学的能力」の測定とその課題
キーワード：学修成果、哲学的能力、自己効力感、アウトカム・アセスメント
<p>発表内容、要旨</p> <p>本発表の目的は哲学教育の意義を学修成果測定の観点から考察するものである。近年、高等教育においては学修目標を策定して上で、それをどれだけ達成できたか、学生や保護者、雇用主などのステークホルダーたちにわかりやすく学修成果を伝えることが求められている。哲学分野においても同様で、全米哲学会では学修成果測定についての声明を公表し、また我が国では「大学教育の分野別質保証のための参照基準：哲学分野」が取りまとめられたことも記憶にあたらしく、そこでは哲学が学んだ学生がどのような能力・知識等を身につけることになるのかが示されている。</p> <p>だが、このように哲学の学修成果は具体的にどのようなものなのか、国内外で策定されているにもかかわらず、これまで実際に学生の能力を測定した研究はほとんど例を見ない。そこで、発表者らは哲学の学修成果についての国内外の策定事例や先行研究を参照し、また学生や雇用主にインタビューを行い、哲学教育の学修成果を示すものとして「哲学的能力尺度」を試行的に定めた。その上で複数の大学において、哲学教育を受けた学生を対象に、哲学教育を多く受けた者と、そうでない者で哲学的能力にどのような違いがあるのか、質問紙調査を実施した。その結果、他の学問分野とは異なり、間接的評価では哲学を学べば学ぶほど哲学的能力は下がる、という興味深い結果が出た。本発表ではこうした調査の経緯と調査結果の解釈について報告し、哲学の学修成果を測定する上での課題を指摘したい。</p>

会場 3 (002 教室)

酒井 雅子 (東京成徳大学)
タイトル：哲学的討論で求められる教師のファシリテート力——ソクラティック・メソッドとP4Cの比較から
キーワード：討論の目的、問答のあり方、合理的自己決定、教師の態度
発表内容、要旨 <p>本研究の目的は、初等中等教育で哲学的討論を行う際、教師に求められるファシリテート力として、問答の技と態度を明らかにすることである。目的の解明は、哲学的討論の原点ともいえるL.ネルソン(1882 - 1927)のソクラティック・メソッドと、ソクラティック・メソッドを導入した学校教育の成功例と評されるM.リップマン (1922 - 2010)の「子供のための哲学」教育プログラム(以下、P4Cと記す)を比較検討し、両者に通じる哲学的討論の特性と、P4Cにおける問答法の特異性を抽出する方法で行う。</p> <p>ソクラティック・メソッドでは、教師は討論への介入を極力避け、大学生の発言の合理性を評価して探究を継続させるためだけの問いを発する。そして、確かであると思っていたことが問い返しによって不確かになり、困惑に満ちた状態に達したとき、討論は終了する。それは、「合理的自己決定」を目的としているからである。</p> <p>一方、P4Cでは、反省的態度と思考力を育てるだけでなく、知的な成果を創発することも討論の目的としている。これにより、小学生から高校生までの学習者に対し、教師は、非形式論理に則り、探究を継続させる問いの発し方をするのは上記メソッドと同じだが、さらに、特異性が二点確認できる。第一に、意味が十分に伝わりにくい発言も探究の中に生かそうとする「探究の地ならし」の問いがあることである。第二に、教師のバイアスに細心の注意を払いながら、解釈を交えて問いを発し、探究の支援をしていることである。後者の問い方は、学習者が自主的に考えることを制限し、考えを歪める危険性を伴うが、そのために、リップマンは、学習者に教師自身を情意的にも認知的にも開放し、学習者と共に探究し続ける態度を教師に求めている。</p> <p>以上、ファシリテートの仕方は、討論の目的や言語能力・思考力の発達段階によって異なるといえる。しかしながら、ソクラティック・メソッドの「合理的自己決定」のあり様は、形を変えて、P4Cにおける初等中等教育の哲学的討論に踏襲されている。</p>

堀越 耀介（東京大学大学院教育学研究科博士後期課程）
タイトル：探究の共同体における「思考」をどのように位置づけるべきか——「子どもの哲学」の目的をめぐって
キーワード：子どもの哲学（P4C）、哲学対話、思考、哲学教育、教育哲学
<p>発表内容、要旨</p> <p>M. リップマンによって創始された「子どもの哲学（Philosophy for Children, P4C）」の教育実践、哲学プラクティスは、本邦を含め、世界中でその実践が試みられている。他方で、リップマンが始めた P4C の実践にも現在では多様な形があるように、その理論にかんしても様々な検討が加えられ、より多様な理論が提示されている。</p> <p>そこで本研究発表は、リップマンの P4C 理論を批判的に検討している G. ビースタや、N. ヴァンシールガムらの研究を参照することで、リップマンの理論にいかなる修正が加えられ、それが再構成されるのかについて、探究の共同体における「思考」をどのように位置づけるべきか、という観点から考察する。</p> <p>プラグマティズムの思想家である C. S. パースや J. デューイの哲学にそのルーツを持つリップマンの理論は、「批判的思考」、「創造的思考」、「ケア的思考」といった、ある意味では「スキルとしての思考」の涵養をその目的に据えているといわれる。他方で、H. アレントや I. レヴィナスらの思想を背景とする、上述のビースタやヴァンシールガムらは、こうしたリップマンの P4C 理論が、ある特定の人間構想や、あらかじめ定められたスキルの涵養や理想を、その達成目的に据えているとして懐疑的な立場をとる。というのも彼らは、そのような想定に基づいた P4C 理論は、対話において自己が他なるもの・他者と対峙することによって、実に多様な主体が世界に対して全く新たなものを持ち込み、創設するという可能性を削ぎ取ってしまうのではないかという懸念を持っているためである。</p> <p>両者のこうした P4C の核心をめぐる対立を検討することから、これからの「子どもの哲学」の理論の発展に向けて、どのような示唆が得られうるだろうか。本研究は、以上のような観点と問題関心を軸とした考察を行う理論的研究として発表される予定である。</p>

皆川 朋生（跡見学園中学校高等学校ほか 非常勤講師）
タイトル：哲学教育における知識の意義について -R・ローティと子どものための哲学を てがかりに-
キーワード：哲学教育 子どものための哲学 哲学対話 Richard Rorty
<p>発表内容、要旨</p> <p>本発表では学校教育の中で行われている「子どものための哲学」を中心とした新しい哲学教育のなかで哲学の知識を学ぶことの意義について、R・ローティの教育についての理論をもとに考察する。</p> <p>日本の学校教育の中で行われる哲学教育の新しいかたちとして、2000年代以降から「子どものための哲学」と呼ばれる方法が登場し現在非常に注目されている。1970年代に「子どものための哲学」を体系化し発展させたマシュー・リップマンによれば、この教育を通じて批判的思考、創造的思考、ケア的思考を育むことができる。こうした思考力や対話を通じて養われるコミュニケーション能力の重要性が注目され、日本の学校現場でも対話を通じて「哲学すること」でなされる教育が盛んに取り入れられ実施されてきている。こうした新しい哲学教育では哲学史などの哲学の知識を積極的に活用するものは多くない。むしろそうした知識を教える教育は「古い哲学教育」として批判するような議論もなされている（福井 2015）。しかし本当に哲学の知識は必要ないのであろうか。</p> <p>アメリカの哲学者 R・ローティは「社会化」と「個性化」による二段階の教育を行うべきである論じている（Rorty 1989）。初めにその社会での常識や知識を教え込む「社会化」の教育を行ったのち、その「社会化」を批判的に捉えなおし再記述する「個性化」の教育を行うのである。このローティの教育理論は哲学教育においても考えることができるのではないか。つまり「社会化」の過程として哲学の知識をある種の定跡として獲得したのちに、その思想を吟味し自らの言葉で「哲学する」ような「個性化」の教育が必要ではないか。本発表ではこのローティの理論をモデルとしながら哲学教育における知識の意義について考察していく。</p>

堀江 剛（大阪大学）
タイトル：哲学する装置：ソクラテック・ダイアローグ
キーワード：ソクラテス、ソクラテック・ダイアローグ、対話、哲学する
<p>発表内容、要旨</p> <p>ソクラテック・ダイアローグ (Socratic Dialogue: SD) とは、少人数の参加者（通常 5-8 人）がグループになり、一定のルールと進行役によって進められる哲学対話ワークショップの方法である。一つのテーマの下で、参加者たちが非常にゆっくり時間をかけて（標準的なもので 2 日半）徹底的に「対話」する。</p> <p>SD は、レオナルト・ネルゾン (Leonard Nelson, 1882-1927) というドイツ新カント派の哲学者が行っていた哲学教育に由来する。彼は、哲学史に出てくる権威ある哲学者の理論や知識を研究することではなく、自分の論理や推論に従って考えを展開することが、本来の意味で「哲学する」ことであると考えていた。本で読んだ知識を持ち込まず、いかなる知的権威にも頼らず、自分たちで立てた「問い」を、自分たちの経験だけから議論し「答え」に至ること、これを大学の演習で実践した。彼は、人々との対話だけから真理を引き出した古代ギリシアの哲学者にちなんで、これを「ソクラテスの方法 Socratic Method」と名付けた。</p> <p>戦後、ネルゾンの弟子グスタフ・ヘックマン (Gustav Heckmann, 1898-1996) がその方法を改良し、大学以外の学校や市民教育の場で精力的に哲学対話を実践した。1970~80 年代、彼の下でこうした対話実践を検討するサークルが形成され「ソクラテック・ダイアローグ」の名称が定着した。今日 SD はドイツ・イギリス・オランダを中心に、学校教育・市民教育のみならず企業研修の方法としても活用されている。</p> <p>発表では、テーマ（問い）・ルール・進行役などに関する SD の独自な特徴を紹介する。それは「グループが哲学する（哲学してしまう）」という視点を提示することでもある。</p>

宮下 篤志（フェリックス・パートナーズ株式会社）

タイトル：経営マネジメントにおける哲学対話の効用—哲学対話のビジネスへの転回の実践報告—

キーワード：経営哲学、実践知、オープン・ダイアログ

発表内容、要旨

発表申請者は、日本におけるビジネスパーソンの方々の種々の教育プログラムを捉え、哲学対話（オープン・ダイアログと称している）を導入し、実践学習の機会を深めている。プラクティショナーとして、実践哲学を研究・実践されている複数の大学教員の方々にお願いしている。本報告は、5年間のビジネスの教育現場における哲学対話の状況と今後の経営マネジメントの世界における拡がりについての考察を報告する。

ビジネスの現場では、哲学対話の実践は乏しい。「哲学」と聞いただけで「難しい」と思い、企画の企業側も消極的になる。日本のビジネス界では若い社員を中心として考えること＝「ロジカルシンキング」が主流で、そのプログラムは多々存在する。しかし、哲学対話をはじめ創造性に関する考察を主体とした学習機会は極めて少ない。したがって、哲学対話に絞った実践学習の企画をしても応募者は極めて少なく、企業側のプログラム採用は少ない。その原因は、ビジネスは定型的、機械的な考察が主流であり、かつ結果へのスピードが要求されるため、創造的で、時間を要するものは理解されない。そもそも戦略実践は「選択と集中」といった絞り込みであり、ダイアログのような言葉を重ね合わせていくといった拡張概念は、あまり有益と捉えられない。

発表申請者は、逆風ではあるが、プラクティショナーの大学の先生方のご尽力を頂きながら、「コンポーネント・プログラム」（オープン・ダイアログと称して）として教育プログラムに参加する受講生の学習を省察する機会として、哲学対話の時間を半日くらい設けている。経験した受講生は、ビジネスの時間でも実践してみたいと意向が数多い。「問い」について対話していくうちに、自分の考えが変わる瞬間を驚きの感を持っているようである。

本発表では、ビジネス界に哲学対話の普及方法を示すのが目的ではなく、選択と集中の厳しい競争優位の確立を目指すビジネスパーソンにとって、哲学対話による考察の必要不可欠性について考えていきたい。特に「創造性」の考察という観点からは、哲学対話はビジネスにとっても重要であり、他社との差別化を図るなら、極めて有益な機会となる。

ビジネスの実践と哲学対話による接合を明らかにし、進化への豊かな考察を生み出す可能性のあることを、発表会場の皆様と共有および批判的討議を図っていきたい。

辻 明典（てつがくカフェ@南相馬）
タイトル：原発禍と人びとの哲学
キーワード：原発事故、対話、詩
<p>発表内容、要旨</p> <p>なにかが起きた。でも私たちはそのことを考える方法も、よく似たできごと、体験も持たない。私たちの視力も聴力もそれについていけない、私たちの語彙ですら役に立たない。私たちの内なる器官すべて、それはみたり聞いたり触れたりするようになっているんです。そのどれも不可能。なにかを理解するためには、人は自分自身の枠から出なくては いけません。（スベトラーナ・アレクシェービッチ, 2011, 『チェルノブイリの祈り』 松本 妙子訳, 岩波現代文庫 p. 31）</p> <p>福島第一原子力発電所事故の後で、私たちが暮らしているのは、花の美しさ、鳥の囀り、森の暗がり、木々のざわめき、川のせせらぎと、セシウムが共存している世界です。なかには、故郷や生業を奪われた人びともおります。一昔前と景色は変わっていないのに、慣れ親しんだはずの山や里に入ることが叶わないのです。</p> <p>ご存知のように、放射性物質は、見ることも、聴くことも、触れることも、匂いを嗅ぐこともできません。ガイガーカウンターを用いて、放射能の影響を Sv や bq といった単位を用いて数値化したり、リスクを比較したりすることによって捉える方法もあるでしょう。</p> <p>私は、2012 年から福島県南相馬市で、細々と「てつがくカフェ」を開催し、地域の方々との対話を続けています。それは原発禍の渦中で、渦中に巻き込まれながらも、私たちの身に起こった出来事について、言葉に信を置いて、語り直していこうとする試みです。私たち自身の言葉で、この出来事と向き合うのです。</p> <p>しかしながら私たちは、この出来事と向き合う言葉を、持ち合わせているのでしょうか？ 原発事故について、私たちは何を語るのでしょうか？ 本発表で性急な答えを求めるのではなく、皆さんと共に、原発事故について考えることができればと思います。</p>

村上 祐子（立教大学理学部）
タイトル：哲学プラクティス B2B
キーワード：哲学コミュニケーション、科学コミュニケーション、学際研究
<p>発表内容、要旨</p> <p>それぞれの成り立ちがどうであれ、科学にかかる議論のかなりの部分が哲学にも適用可能であるように、科学コミュニケーションにかかる論点は哲学者・哲学研究者と非哲学者とのコミュニケーションにも適用可能である。当発表では、これを広く「哲学コミュニケーション」と呼ぶことを提案する。すなわち、子供のための哲学、一般市民との対話はもとより、哲学者と他分野の専門家との共同作業も哲学プラクティスとして考察すべきである。また、高等教育における伝統的な哲学教育についても包摂して議論を進めることができるだろう。</p> <p>このうち哲学者と他分野の専門家がそれぞれの専門領域を生かして共同プロジェクトに携わる場合を哲学プラクティス B2B とみなそう。このような実践では、プロジェクトが成功すれば、プロジェクト関係者は最悪の場合哲学に理解がなくても、別に構わないケースもあるだろう。つまり哲学プラクティスの目的は、必ずしも「参加者が哲学に触れ、理解する」と置く必要はなくなる一方で、哲学的に（とりわけ方法論のレベルでクリティカルに）考えることの社会的ニーズを確保することとなる。</p> <p>当発表では、発表者の経験と観察を踏まえ、人工知能分野にかかる哲学者・倫理学者への参画ニーズと実践について、概要と今後の展望を述べる。</p>

会場 4 (003 教室)

田代 侘奈 (私立明星学園中学校 総合探究科 非常勤講師 / 合同会社 GENAU)
タイトル: よい問いとはなにか? ~みんなで考えるに値する哲学的な問いをつくるワークショップ~
キーワード: 問いを立てる 哲学的な問い ファシリテーション 教育 社会人
発表内容、要旨 <p>哲学プラクティスに携わる私たちでさえ、「哲学的な問いとは何か?」と問われ答えに詰まることがある。哲学の知識や哲学対話の経験があるファシリテーターであれば、「哲学的ではない問い」を無意識に「哲学的な問い」に変換し、対話をなんとなくうまくいかせることもできるかもしれない。しかし、哲学プラクティスが広まることで、哲学を専門的に研究したことがなく、哲学対話の経験を積む機会もなかなかない人がファシリテーションを務めることもあるだろう。誰もが哲学対話を実践できるようになる未来は望ましい。ノウハウを持った者が「なんとなく」判断している「みんなで考えるに値する哲学的な良い問い」とは一体何であるのかを言語化し、役に立つメソッドのようなものを取り出してみることで、そのような未来に貢献したい。</p> <p>発表者二人は現在、学校の授業で哲学対話を行ったり、市民大学で哲学の講座を開いたり、ビジネスパーソンに対して哲学のワークショップを提供したりしている。これまで実践を通して学んだことは、「みんなで考えるに値する良い問い」があれば、コミュニティは活性化し、新しい発見やさらなる問いが生まれるということだ。それによってプロジェクトのビジョンやコンセプトが明確になったり、今までにない切り口のサービスが生まれたりすることも十分ある。</p> <p>哲学プラクティスの可能性を社会へと広げていくために、ファシリテーターが「問い」に対して自覚的になることを目指したい。そのために、哲学 (=philosophia 知 (真理) を愛すること) に立ち返り「問い」の本質に迫るワークショップを開催する。今回のワークショップで考えたいことは以下の二つである。</p> <ol style="list-style-type: none">①なぜ“他者”と一緒に考える必要があるのか?②他者と考えるに値するよい問いとは、どんな問いなのか? <p>発表者がこれまでの経験を材料にして哲学的な問いとそうではない問いを分けた「問いの分類」と、「みんなで考えるに値する哲学的なよい問いチェックリスト」を叩き台にして、ワークショップの参加者とともに、実際に「みんなで考えるに値する問い」を考えてみたい。</p>

